

# オーロラ

黄金に取りつかれた男女は飢餓の中、  
美女の軟肉を貪り喰らう



作者 大黒達也

『オーロラ』

作者 大黒達也

【あらすじ】

温暖化の影響で、環境破壊が進むアラスカの大地。あるエスキモーの村も大きな被害を受け、住民達の多くが都心部に移住を余儀なくされている。

そんな中で、一部の村人だけが、移住を拒み独自の生活を始めようとしていた。絶対的な食糧不足の中、黄金と肉欲にとりつかれた男女の絶望を描いている。

【登場人物】

サキウス

筋骨逞しい村の荒くれ男。野卑で強欲な性格の持ち主。

アンナ

サキウスの義妹、白人の父を持つハーフ。村一番の美女であり、男でも女でも愛せるバイセクシャル。

カステイアニ

サキウスの実兄。ニューヨークで開業医をしていたが、都会の生活に疲れ村に戻ってきた。長身で痩せ形のイン

テリ男。

香月里奈かつきりな

日本の有名女優。美貌と極上の肢体の持ち主。TV番組の取材で、アラスカにあるエスキモーの村を訪れる。

レイチェル グレイ

カリフォルニア大学に通う女子大生。燃え上がるような美しい金髪とモデルのような容姿を持つ美女。ゼミの研究テーマである温暖化の研究のために村を訪れる。

桑田洋子

くわた ようこ

レイチェル グレイの同級生。大きな瞳が美しく、色白で瑞々しい素肌の持ち主。

【本編】

第一章 廃屋

マイナス二十度。どこまでも続く白銀の世界。強烈な紫外線が照りつける白い大地を一台のスノーモービルが、快音を響かせながら疾走していく。座席には二人の若い女達が乗っていた。運転するのはエキゾチックで美しい目鼻立ちをした美女であり、その後ろには、運転手の女よりさらに美しい容姿をした女がしがみ付いていた。美女二人を乗せたスノーモービルは、大地の真ただただ中にある廃屋に向かっていった。

「着いたよ」

運転席の女はスノーモービルのエンジンを停止させ、

無愛想な感じで後部席の女に声をかけた。

「ここなのね？」

声をかけられた女は、分厚い防寒着の風防を開き、目の前の建物を見上げた。そこにはもう何年も使用していないと思われる廃屋が建っていた。二階建てで建坪は数百坪もあるだろうか。建物の屋根には巨大な煙突が見えた。民家というより工場跡地のような感じであった。不思議なことに周囲には硫黄臭が漂っていた。

ふたりの女達はスノーモービルから降り立った。後部席の女の方が長身だった。身長は百七十センチ近くもあり、モデルのようにスラリと伸びた足が美しかった。ふたりは風雪のために壊れかけたドアを開け、廃屋の中に入った。

内部は意外と暖かかった。民家に見られる家具の類は無く、事務机やロッカーが無造作な感じで並べられていた。窓から強烈な紫外線を含んだ陽光が差し込んでいた。

「ここは二十年近くも無人なんだよ」

スノーモービルを運転していた女が、独り言のように言った。

「アンナさんは、初めてここに来たの？」

「そうだよ。こんな薄気味の悪い場所に好き好んで来る訳ないさ。里奈さんがくれる金のためだよ」

「ここ硫黄臭くない？」

「金を掘っていたからね。温泉でも掘り当てたんじゃないかな」

エキゾチックな顔立ちをした女はアンナといい、地元

出身でガイドをしていた。アンナに里奈と呼ばれた女は、日本の女優でTV番組の取材のために単独でアラスカの地を訪れていた。女優による単独取材など極めて異例なことであった。里奈は少女時代、海外生活が長く、英語は堪能であった。

「ここは金の採掘場だったんだよ。採掘場所はここ裏手にあるんだけど。予想していたより埋蔵量が少なく、途中で事業は中止されたんだ」

「中を撮影したいんだけど」

「好きにしたらいいよ。持ち主だって、このことはとっくに忘れてるさ」

その後、里奈はアンナをその部屋に残し、リュックから小型のTVカメラを取り出し、他の部屋の探索に出か



けた。どの部屋も埃にまみれで、同じような感じであった。建物の中央にある部屋の壁には一面拳大の穴が無数に開いていた。人口的にあげられた穴では無かった。廊下には一面小石や岩が散乱していた。穴やドアからは、白煙が朦々と噴き出していた。里奈は静かにドアノブを回した。開け放たれた入口からは、熱気とともに白煙が噴き出した。ドアを開けたことで室内の水蒸気が拡散し、室内の様子がはっきりとしてきた。そこは元シャワールームであった場所と思われた。広さ三〇畳ほどの室内の中央部分には、縦三メートル幅一メートルほどの大きな亀裂ができており、そこから透明な湯が噴き出していた。湧き出した湯は室内の隅にある排水溝に吸い込まれていた。これが硫黄臭の原因だったのだと里奈は思った。亀

裂の形状から人手によるものでは無く、マグマの地下活動により自然にできたものと思われた。

壁一面に穿たれた穴も水蒸気爆発によるものだろうか。小規模なものだったので建物への被害は比較的小さかったのだろうか。

その場に屈みこんで、慎重な手つきで床を流れる湯に触ってみた。火傷するほどの温度では無かった。四十度位であり、むしろ心地よかった。里奈は周囲を見渡し、着ていた衣服を脱ぎ始めた。すぐにシミひとつなく、極上の美しい裸身が露となった。里奈は部屋の中央にできた亀裂を覗き込んだ。深さは一メートルくらいだろうか。剥きだしの岩肌が見えていた。亀裂のあちこちから湯が噴き出していた。

里奈は片足からゆっくりと湯に裸身を沈めた。あまりの心地よさに思わず溜息を漏らしていた。辺境の地でこれほど快適な温泉を見つけたのだ。里奈は微笑みを浮かべていた。ふと亀裂の底を見ると、黄金色に輝く拳大ほどの岩を見つけた。里奈はそれを掴み上げ、じっくりと観察した。里奈の両目が大きく見開かれた。

「自然の金塊だわ！」

里奈は思わず独り言を言っていた。その岩は、黄金色に光輝いていた。里奈は再び、亀裂の底を見渡した。よく見ると同じような金塊がいくつも転がっていた。里奈は以前、TV番組に出演したときのことを思い出していた。番組では十九世紀のオーストラリアで発見された、六九キロもの天然の金塊を紹介していた。この地がかつ

て金鉱石の採掘場であったことを思い出した。

里奈の脳裏には薔薇色の人生が浮かんでいた。

「こんなところで何しているのさ？」

里奈は現実には引き戻された。アンナが亀裂の縁に立ち、里奈を見下ろしていた。里奈は見た。アンナが里奈の裸身を食い入るように見詰めているのを。里奈は思わず、乳房を両手で隠した。

「温泉を見つけたのよ」

里奈の声は上ずって聞こえた。金塊のことは話さなかった。持っていた金塊は自然な感じで亀裂の底に落とし  
た。

「ふーん。そうなんだ」

「貴女も入らない。凄く気持ちがいいわよ」

「……」

アンナはそれには答えず、欲情に濡れた視線で、里奈の裸身を舐めまわすように見ていた。

「ねえ。どおしたの？」

里奈は無言で自分の裸を見詰めるアンナに恐怖心を覚えた。アンナの瞳には明らかに欲情の光が認められた。

「いいから。上がっておいで」

「何？」

「ごたごた言ってんじゃないよ！もたもたしてたら刺す

よ」

アンナは里奈に刃渡り三十センチの大型狩猟ナイフを見せつけた。

「どうして。私が何かしたの？」

「お前があんまりにもきれいだからさ。アタイはね。バインだよ。バイセクシャル、わかるだろう？お前がきれいな裸を見せつけるから我慢できなくなったのさ」

「何を言っているの？」

「お前を犯したいと言っているのさ。お前のケツやマ＊コを舐めまわしたいんだよ」

アンナは亀裂の縁に膝をついて、里奈の乳房を触ろうとした。

「止めて！変態！」

里奈は大声をあげて、後さった。

「何だって！もう一度言ってみな。お前のことをぶち殺してからだって、楽しめるんだからね」

アンナは、片手に持っていた狩猟用ナイフを振り上げ

た。

「お願い。許して。殺さないで」

里奈は、美しい顔を恐怖に歪めて嗚咽を漏らした。

「助かりたかったら、ここに四つん這いになって、ケツを見せるんだよ」

「お願い。助けて。そうだ！貴女にも金塊をあげるわ」

里奈は亀裂の底から金塊を拾い、アンナに見せた。

「金塊だって……」

アンナは里奈が差し出した金塊を受け取り、食い入る

ように見詰めた。

「まだ、たくさんあるのよ。二人で分けても十分過ぎる

ほどよ」

「二人で分けるだって？ここはアタイ達の土地だよ。よ

そ者のお前には何の権利もないんだ」

アンナは上擦った声で言った。

「見つけたのは私なのよ！」

里奈は亀裂の底に立ち上がり、アンナを睨みつけた。

「そうかい。そんなに痛い目にあいたいんだね。優しく

抱いてあげようと思っただけだね」

アンナの瞳が再び淫らな光をたたえはじめた。

「何よ。変態のくせに。あんたになんか抱かれるつもり

はないわ」

里奈は黄金への執着のために恐怖すら忘れてしまっ

た。そのときアンナの腕が素早く動いた。狩猟ナイフ

が宙を切り、里奈は肩先に鋭い痛みを覚えた。見ると長

さ五センチほどの切り傷ができていた。傷は深くは無か



った。里奈は我に返った。恐怖心が沸々と湧き上がってきた。

「止めて！殺さないで！」

里奈は泣き叫んだ。

「早く上がってくるんだよ。今度はお前の可愛い顔を切り裂いてあげようか？」

アンナは里奈を見下ろし、冷たい笑みを投げかけた。

里奈はノロノロとした動作で亀裂から這い上がり、



アンナの前で四つん這いの姿勢になった。

「オマ＊コきれいだね。ピンク色じゃないか。あんまり使ってないようだ」

アンナの荒い息を下半身に感じていた。アンナは里奈の背後に膝間ついて食い入るように股間を見詰めていた。不意に、尻を鷲掴みにされ、膣に生暖かい舌で舐られた。アンナの生暖かい舌が膣からアヌスにかけて舐め上げてきた。

里奈には同性との性的な経験は無かった。おぞましさのあまり身震いをした。アンナは狂ったように里奈の膣やクリトリスを舐め続けた。里奈は、アンナのあまりに執拗な責めに気が遠くなりかけていた。

「どうだい？女に犯られるのも悪くないだろう？それに

してもお前のオマ＊コは本当にいい味しているよ」

アンナは畳み掛けるように膣を激しい勢いで舐った・

「お願い。もう勘弁して……」

同性に犯される嫌悪感とともに快感が湧き上がった。

白くシミひとつない美尻が震え戦いた。

「何だって。もっと犯して下さいって言うのかい」

アンナが動いた。里奈を仰向けにさせ両足を大きく開

いた。欲情に濡れた視線で里奈の形の良い乳房を見詰め

ながら、膣に指を挿入した。里奈は鋭い喘ぎ声をあげ、

背筋を仰け反らせた。

「凄く締め付けてくれるね。これじゃチンポなら一分と

持たないね。本当に淫乱なメスだね。お前は」

アンナは里奈の裸身のみでなく、精神も貪ろうとして

いた。

同性の弱点を知り尽くしたアンナの責めは、的確に快感の壺を探り当てていく。アンナの指が里奈の膣壁を擦り上げる度に、里奈は全身を震わせ、喘ぎ声を洩らした。

突然、不意を突くようにアンナの指が里奈のアヌスに差し込まれた。内臓を搔き分けられるような感触と膣壁を擦られる感覚に脳がスパークした。アンナの腕を掴みながら背筋を仰け反らせるようにして果てた。

それでもアンナは里奈を開放しなかった。里奈の硬くなった乳首を舐めてきた。

「もう許して。お願い」

里奈は、アクメの余韻にひたりながら、アンナに懇願した。

「何言っているんだい？こんなに濡らしているのに。本当にお前は淫乱な女だよ」

アンナは里奈の膣に指を指し入れて内部を掻き回した。咽び泣く里奈の口に吸い付き、舌を吸い出して存分に吸い上げた。再びうつ伏せに横たえ、むき卵のようにすべすべで白い里奈の尻の割れ目に顔を入れ、アヌスを激しい勢いで舐った。里奈の咽び泣きとアンナの呼吸音が廃屋の中に響いていた。同性による凌辱は際限もなく続けられた。

何度逝かされたか記憶が定かではなくなっていた。

「目を覚ましな。可愛い娘ちゃん」

里奈は少しの間、意識を失っていたようだ。

目の前に彫りの深いアンナの顔があった。

「お前をどうしようか迷っているんだ。お前は好みの女だからね。でもこんなことされちゃ。村に戻ったらアタイのことを警察につき出すんじゃないかってね」

アンナは狡猾な笑みを浮かべた。手には無骨なハンティングナイフが握られていた。

「そんなことは知ません。だからもう許してください」  
命の危険を感じた里奈は、起き上がりアンナの前で土下座をした。

「口では簡単に言えんだよ。そうだね。アタイの女になるって誓ったら、少しの間生かしておいてやってもいいよ」

「女に……」

「そうだよ。アタイの奴隷になるんなら考えてもいいか

な  
」

「……わかりました。何でもしますから殺さないでくだ

さい」

「じゃあ。最初にオナニーを見せてみな。ちゃんと逝つたらアタイの奴隷にしてあげるよ」

「……」

「早くするんだよ！」

里奈はアンナの前に仰向けに横たわり、左手の指先で

クリトリスを弄り始めた。

「ケツに指をいれてかき回すんだよ」

アンナは、里奈の横でかぶりつく様に顔を下腹部に近

つけて、満面の笑みを浮かべていた。里奈は言われるま

まにアヌスに指先を入れた。初めての体験であった。ア



又スの中で自分の指が蠢いているのを遠い意識で感じていた。これは夢なのだと自身に言い聞かせた。

「もっと気を入れるんだよ！」

里奈は快感のあまり、少しの間、意識を失っていた。

気が付くと仰向けの姿勢で、湯が噴出する亀裂の側に横たわっていた。下半身で何かが蠢いていた。下半身に爛れるような疼きを感じていた。見ると、アンナが狂ったように里奈の膺を舐めていた。アンナも全裸であった。室内は亀裂から湧き上がる湯のせいで蒸し風呂のように暑かった。

アンナが膝を付いている床の近くには、大型狩猟ナイフが無造作な感じで突きたてられていた。里奈は快感に

悶えながら、死の危険を感じた。アンナは金塊の存在を知っており、口封じのために里奈を手にかける可能性があった。里奈はアンナに悟られぬように、手探りで得物を探した。

左手が何かを掴んだ。それは里奈が亀裂の底から拾い上げた金塊だった。

里奈はそれを握りしめ、アンナの頭部に叩き付けた。

「うっ……」

アンナが低く呻いて、床に横たわった。ピクリとも動かなくなった。額からは、鮮血が滴り落ちていた。里奈はアンナが死んだものと思った。

立ち上がり、衣服が置いてある廊下に出ようとした。

「待ちな。よくもやってくれたね」

振り向くと狩猟用ナイフを手にしたアンナが凄まじい表情で、里奈を睨みつけていた。アンナの頭部から鮮血が滴り落ちていた。

「……」

里奈は逃げようとしたが、恐怖のあまり腰が抜けて動くことができなかった。アンナが体当たりをしてきた。

腹部に激痛を感じた。狩猟用ナイフが根元まで白い腹に突き刺さっていた。里奈の両目が大きく見開かれた。

「痛いだろう？もうすぐ楽になるからね」

アンナは、茫然と立ち尽くす里奈のきれいな乳房を鷲掴みにした。薄笑いを浮かべながら、両手でナイフを一口气に引き抜いた。鮮血が吹き出した。里奈はゆっくりとその場に崩れ落ちた。大量の出血が急速に体力を奪って

いた。

アンナは残忍な笑み浮かべ、深手を負った里奈の両足を乱暴に押し開き、片手を膺に強引に挿じ込んだ。

「い、痛い……。お願い、助けて……」

里奈が全身を震わせ、泣き喚いた。

「お前はもう助からないよ。死ぬ前にもう一度楽しませてもらおうね」

アンナの片手が膺内で蠢いていた。アンナは、空いている方の手を里奈のアヌスに挿じ込んできた。体内でアンナの手が縦横無尽に蠢いている。

「凄く締め付けるよ」

アンナの笑い声が遠くの方から聞こえてきた。里奈は凄まじいまでの寒さを感じながら、息を引き取った。

数時間後、アンアは里奈の死体を廃屋の裏手にある深さ二メートルほどのクレバスに蹴落とした。クレバスの底には、里奈の全裸死体が横たわっていた。

アンナは、里奈の私物であるリュックを背負っていた。中にはシャワールームで見つけた金塊が詰まっております。っしりと重かった。

## 第二章 飢餓の日々

その廃屋から十キロほどの距離にあるアンナの村では、村長の家で会合が開かれていた。各家の家長二十人が、居間に集まり、車座になり熱い議論を交わしていた。

「もう一刻の猶予も無いな」

「ああ、夏が来たら、村中の家が潰れてしまうぞ」

「そうだ。俺の家も去年、潰れちゃった」

温暖化の影響により、地盤である永久凍土が溶けだし、すでに半数の家屋が倒壊していた。

「アザラシだって、もう何か月も見えない」

「もっと北に行っているんじゃないか」

「こんな状態が続けば、生活は成り立たないよ」

「村長。どうすりゃあいいんだ？」

ひとりの若い男が立ち上がり、最年長と思われる白髪の男に尋ねた。

「やはり、村を捨てるしか無いな」

村長と呼ばれた男は、重い口を開いた。先ほどから皆の意見に耳を傾けているだけだった。

「村を捨て、南の街に行くしかないだろう。今なら政府の援助も期待できる」

「俺は、この村を出ていくのには反対だ」

その時、ひとりの男が立ち上がった。真黒に日焼けし、筋骨隆々とした男はサキウスという名前だった、村一番の力持ちであるが、気性が荒く村人と喧嘩が絶えなかった。年の頃は三十代半ばと思われる。

「俺も気乗りしないな。俺は都会が厭で、生まれ故郷に

帰ってきたんでね」

今度は、サキウスの隣に座っていた男が立ち上がった。

男は長身で痩せ形の体軀をしていた。男はカステイアニという名前であり、村の出であるが、奨学金で大学を出て、ニューヨークで市立病院に医師として勤務していた。サキウスの実兄という関係であった。

「それじゃあ、いったいお前達はどうしたいんだ？」

村長の問いに対し二人は押し黙った。温暖化の影響で村中の家屋は倒壊の危機に瀕しており、生活の糧であるアザラシやトドも激減していた。打つ手は無かった。

その時、居間の扉が開けられ、アンナが姿を見せた。

「帰ったのか？美人の日本人はどうした？」

サキウスが義妹であるアンナに声をかけた。



「隣村に送ってきたところさ。ちょっと、義兄さん達に話したいことがあるんだけど」

「今、大事な打ち合わせをしているんだよ」

カステイアニが、村長の顔色を伺った。

「いいさ。休憩にしよう。話を聞いてあげたらいい」

村長は、立ち上がり居間の奥にあるトイレに向かった。

「これ見て頂戴」

サキウスとカステイアニを村長宅の裏に誘ったアンナが、二人に廃屋で見つけた金塊を見せた。

「ど……どうしたんだ？金じゃないか！」

「しっ！」

アンナは驚きの表情を浮かべる二人に、静かにするよ  
うに促した。

「どこで見つけた？」

アンナから金塊を受け取ったサキウスが訪ねた。

「村外れの廃屋よ。金の採掘場だったところ」

「信じられない。ほとんど純金に近いじゃないか」

カステイアニが深い溜息をついた。

「まだ、いっぱいあるのよ」

「これで決まったな。俺達三人は村に残る。そして金を  
掘り出すんだ」

サキウスは目を細めて金塊を見詰めていた。

一週間後、ほとんどの住人が村を捨て、政府が用意し

たカリフォルニアの街に移住した。残ったのはサキウス、カステイアニそれにアンナの三人だけであった。村人達は、三人を心配して貯蔵しておいたジャガイモや玉ねぎを彼らに残していった。アザラシの肉も僅かであるが置いていった。

サキウス達は、大型ソリに食料や雑貨品を満載し、スノーモービルで曳いて廃屋を目指した。

採掘場の廃屋には、温泉が噴出しているシャワールームの他に、従業員の宿泊施設や事務所などがあった。廃屋といっても、元々の造りはしっかりしていたので、風雪が屋内に入ってくることは無かった。サキウス達は従業員の宿泊施設を住居とすることに決めた。村から持つ

てきた野菜は、一階倉庫に納めた。

屋外の気温はマイナス三十度くらいであったが、シャワールームから噴出する温泉水により、屋内は十度近くまで温められていた。

アザラシの肉は、屋外にある倉庫に天井から吊るした。そこは外気温とほぼ同じであり、一年近くも肉を保存することができた。

「カステイアニ。寝室なんだけど、もう少し暖かくできないかな」

アンナとカステイアニは、従業員の宿泊施設であった部屋の後片付けをしていた。

「まかしてとけて。俺にいい考えがある」

カステイアニは倉庫で見つけた排水用のホースを使つて、シャワールームから寝室まで、温泉水を引いて、それを一旦ドラム缶に蓄えて暖房の代わりとした。ドラム缶に蓄えた温泉水は、部屋の簡易シンクの排水溝から室外に排出した。それで室内は、二十度近くまで温度を上げることができた。

暖房の次に取りかかったのは、電気の確保であった。カステイアニとサキウスふたりで、一階の倉庫に村から運んできた発動発電機を取り付けた。燃料は村中のタンクに残っていたものを集めてきたもので、一年分くらいは持つ筈であった。

その倉庫には窓があつたので、そこに排気用の簡易ダクトを取りつけた。

発動発電機が起動して、室内に取り付けた照明が輝きだした。アンナはテレビやビデオも持参していた。レズ物のアダルトビデオを大量に所有していた。

「さてと。そろそろ金の採掘といくか？」

「いいね。一年後には俺達、全米一の金持ちになるぞ」

「そしたら、アタイはハワイに移住するわ」

三人は、シャワールームで、温泉水が噴出する亀裂の淵に立っていた。中は蒸し風呂のように暑く、三人とも全裸だった。

「アンナ、お前は何か着た方がいい」

カステイアニが義妹にタオルを渡した。

「そうだ、気が散るじゃないか」

サキウスはアンナの美しい裸身を血走った目で見詰めていた。カステイアニも男根を押さえていた。

「何なら、仕事の前に抜いてやろうか？」

アンナはカステイアニの股間を見ながら言った。

「何、馬鹿なこと言っているんだ！」

カステイアニは真顔でアンナを叱りつけた。

「だって、アタイ達は血の繋がりは無いんだよ。何をし

たっつていいじゃん」

「兄さん。俺もそう思う。このままじゃ。仕事にならない」

サキウスは義妹に勃起した男根を見せつけた。

「勝手にしろ！俺は始めるぞ」

カステイアニはむっとした顔をして、亀裂に溜まった

湯に身を沈めた。深さ一メートルほどの湯に潜り、亀裂の底に転がっている金塊を拾い始めた。

一方、サキウスとアンナは、お互いを貪り始めた。アンナが黒々としたサキウスの男根を美味しそうに舐めていた。

カステイアニは数十個の金塊を亀裂の底から拾い上げた頃、サキウスはアンナを四つん這いにさせ、背後から犯していた。アンナの鋭い喘ぎ声がシャワールーム内に響いていた。

「いいかげんに仕事を始めたらどうだ？」

カステイアニがうんざりした表情で二人に声をかけた。

「ああ。アンナのオマ\*コに中だししたら、仕事にかか  
るよ」



サキウスが腰をアンナの尻に叩きつけながら答えた。

「厭だよ。中だしは、兄妹が夫婦になっちゃうじゃないか」

アンナはあまりに気持ちがいいのか、口元には涎をた  
たえていた。

三人の廃屋での生活は単調なものだった。外気温はマ

イナス三十度位もあり、外に出ることは殆ど無かった。

屋外の倉庫にアザラシの肉を取りにいくくらいであった。

食事とSEXそれに金の採掘がすべてであった。カステ

イアニも最初は義理の妹との性交渉を拒んでいたが、単

調な生活に耐え切れず、アンナを抱くようになった。

今も寝室ではアンナがカステイアニの股間に座り、男

根を口に頬張っていた。アンナの性技は巧みであり、何  
度も精液を絞り取られた。

「気持ちいいでしょう？」

アンナが顔を上げ、カステイアニに話し掛けた。

「ああ……」

カステイアニは両手を頭の下に敷いて、目を閉じてい  
た。再びアンナがカステイアニの男根を呑み込んだ。ア  
ンナの指がカステイアニのアヌスを刺激してくる。隣の  
ベッドではサキウスが全裸で大鼾をかいて寝ていた。卑  
猥な夢でも見ているのか、男根が勃起していた。

翌朝、三人は従業員用の食堂であった部屋で朝食を摂  
っていた。主食はジャガイモを煮たものだった。僅かば

かりのアザラシの焼き肉が添えられていた。廃屋での生活は、既に三か月余りも続いていた。春がすぐそこまで来ていた。

「毎日、ジャガイモばかりかよ」

サキウスが不平を洩らした。

「ジャガイモにはビタミンCが豊富に含まれているんだ。食べないと脚気になるぞ」

カステイアニが軽くサキウスを諫めた。

「でもさ。兄貴だって、血の滴るアザラシのレバーを食いたいだろう」

「止めてよ。サキウス。思い出させないで」

アンナが深い溜息を洩らした。

「そうだな。随分長い間、生肉を口にしていないな」

カステイアニが遠くを見るような表情で言った。捕らえたばかりのアザラシを解体している光景が脳裏を過った。新鮮なレバーや心臓に齧り付く様子が心をとらえていた。自然と生唾が湧いてきた。

「俺は新鮮な肉が食いたいんだ！何ならアンナのケツの肉でもいいぞ。脂が載って旨そうだからな」

サキウスが、ジャガイモをばくついているアンナに淫らな視線を送った。

「昔中国では人肉を調理して食べていたそうだ。女の肉の方が男より柔らかくて美味しいという話だ」

珍しくカステイアニがサキウスの話に興味を覚えたようだ。

「止めてよ。ふたりとも。アタイを食べるなんて。冗談

だろ？」

アンナが食べかけのジャガイモを皿に置いた。

「アザラシの肉も切れちまったからな。これから毎日、ジャガイモや玉ネギばかりじゃ飢え死にしてしまうぜ」

ジャガイモが苦手なサキウスは以前より十キロも痩せていた。

「ねえ。村に行ってみようよ。誰かがアザラシの肉を残しているかもよ」

アンナが真顔で二人に言った。

「あり得ないな。この間行ってみただろう？村中家探しして、見つかったのはジャガイモばかりだった」

カステイアニが頭を振って、天井を見上げた。

「じゃあ。気晴らしに狩りに出ようよ。きっと、アザラ

シヤトドが見つかると思うな」

「それは無理だろうな。半年以上も姿を見ていない。この辺のアザラシはもつと北に移動したんだ」

「だからって。……アタイを食べると言うの！」

アンナは立ち上がり、二人を交互に睨みつけた。

「……」

サキウスとカステイアニは無言でアンナをじっと見返した。

「そ……そうだ。肉ならあるよ。カステイアニ？さつき、女の肉は美味しいと言ったね？」

「食べたことは無いが、聞いた話ではな」

「ねえ。覚えている？里奈のこと。日本から来た女優よ」

「里奈がどうしたって言うんだ？」

サキウスが不機嫌な感じで答えた。

「里奈は日本に帰っちゃいないんだよ。アタイが殺して裏のクレバスに遺体を捨てたんだ！」

最後はほとんど叫び声になっていた。

「……」

少しの間、誰も口をきこうとしなかった。

半日後、食堂のテーブルには、里奈の全裸死体が横た

えられていた。マイナス三十度で急速冷凍されたためか、

死体は生前そのままの美しさを保っていた。

「もういいかな？」

テーブルの席に着いていたサキウスが、兄のカステイ

アニに上擦った声で尋ねた。右手にはしっかりと肉切り包丁の柄を握りしめていた。

「そろそろいいだろう。中の方はまだ凍っているだろうけど」

カステイアニは手馴れた手付きで、里奈の腹部を肉切り包丁で裂いていく。

内臓をかき分け、肝臓を両手で取り出した。サキウスもアンナも一言も発すること無しにカステイアニの動きに注目していた。

取り出した肝臓を俎板の上に載せ、細かくスライスした。一片をつまみ上げ匂いを嗅いだ。

「腐ってはいない。大丈夫だ」

カステイアニはアンナに微笑みかけた。アンナは大き



く頷き、ごくりと生唾を呑み込んだ。

カステイアニは肝臓の切れ端を口に放り込んだ。目を閉じて深い溜息をついた。

「どうなんだ？美味しいのか？」

サキウスが後ろからカステイアニの肩を叩いた。

「舌の上で蕩けるぞ。最高の味だよ」

それを聞いた二人は競い合うように里奈の肝臓を頬張った。

「こいつはいけるぞ！アザラシより美味いかも知れない」

「半年ぶりの生肉だからな。美味しく感じる筈だよ」

「アタイはこの味好きだな。癖になりそうだよ。そうだ、カステイアニ。今度はオマ＊コを食べてみたいな」

「いいけど、あんまり一気に食べるなよ。ずっと生肉を食っていないから、急に食べ過ぎると胃をやられるぞ」

カステイアニはアンナに話し掛けながら、里奈の股間に肉切り包丁を差し込み、動かした。サクサクと小気味の良い音がしていた。切り取った臆周辺の肉を俎板に載せ、三等分にした。切り分けられた臆肉には陰毛がついていた。

「コリコリとした歯触りがいいね」

アンナは笑顔で言った。

「こいつは珍味だよ。もっと食いたい」

サキウスは淫らな目つきでアンナの股間を見詰めた。

「馬鹿。あんたなんかに食われないよ」

アンナは片手でサキウスの股間を軽く叩いた。

「よし、残りの肉を切り分けよう。二十キロ以上は肉が取れるだろう」

カステイアニが二人に手伝うように促した。

「当分は食いつなげるな」

サキウスが里奈の冷たい乳房を驚掴みにしながら言った。

「そうだよ。美味しい肉を食べて、いっぱい金を掘らなきゃ」

三人は手分けして、里奈の死体を解体して行った。美しい両足が切断され、盛り上がった白い尻肉が削り取られた。乳房も切り取られ、金属製のボールに入れられた。

両腕も切断され、肉が削り取られていく。背中の肉も捨てる場所は無かった。内臓もほとんど捨てるどころ

が無かった。

カステイアニが里奈の口を開け、舌を切り取り、頭部をゴミ箱に捨てようとした。

「頭は捨てちゃうの？勿体ないじゃん！」

「ヤコブ病という病気を知らないのか？脳がスポンジみたくなっちゃうぞ」

「いいぞ。カステイアニ。アンナに里奈の脳味噌を食わせてやれよ。俺は狂ったアンナのマ\*コを食うから」

「まだ、言っているの。アンタ、うざいよ」

骨も捨てるどころが無かった。金鋸で切断していく。

スープの出汁にするつもりだった。解体は二時間ほどで完了した。生前は男も女も魅了した極上の肉体は切り分けられ、いくつかのボールに納められた。

里奈の肉を得てから、三人は以前より金塊の採掘に集中するようになった。特にサキウスの働きは目覚ましかった。今も採掘現場であるシャワールームではサキウスが全裸になり、ツルハシで亀裂を広げていた。分厚い胸板が汗で光っていた。ツルハシが上下する度に亀裂の縁が砕け散った。亀裂は最初に比べると三倍くらい大きくなっていった。

アンナは、砕け散った岩を、拾い集める役だ。カステイアニが岩の選別を行っていた。当初に比べ天然の金塊を掘り当てる率は低くはなったが、代わりに金の含有率が高い金鉱石がいくらかでも採れた。

掘り出した金塊や金鉱石は、寝室と隣り合わせの倉庫に保管していた。広さ十畳あまりのスペースに堆く積まれていた。一日の作業を終えた三人は倉庫の前に立ち、これまでに掘り出した金塊や金鉱石を食い入るように見詰めていた。

「けっこう採れたよね。これぐらいでどれくらいになるの？」

アンナが直ぐ傍で腕組をして金塊に魅入っているカステリアニに尋ねた。

「そうだな。ざっと三百万ドルといったところだ」

「ひとり百万ドルになるの！」

アンナは目を丸くして素っ頓狂な声を上げた。

「まだまだ、掘るぞ。肉も手に入れたし、当分は掘って、

掘って掘りまくる！」

サキウスが鼻息を荒くしていた。

「アザラシだってきつとやってくるよ」

「いや、来ないな。俺は二本足のアザラシでもいいぞ。

若くてピチピチのメスなら大歓迎だ」

サキウスが卑猥な笑みを浮かべながら言った。

「まだ言っているの」

アンナが少しむくれた顔で答えた。

「お前のことを言っている訳じゃない。里奈のようにお

バカな観光客が来るかもしれないからな」

サキウスが笑いながらアンナの額を軽く小突いた。

「最近は温暖化流行だからな。俺達は死ぬほどの思いを

していると言うのに、人の不幸を楽しんでいやがる」

「ここは俺達が先祖代々守ってきた土地だ。言ってみれば俺達の領土だ。侵入者は極刑にするぜ。俺達の金塊を盗られてたまるか。男は銃殺刑だ。若くてきれいな女は強姦刑の後に食刑にしてやる」

大量の金を前にして三人は上機嫌だった。冗談とも言えぬ会話で盛り上がった。

その日の夕飯は、里奈の腿肉で作ったステーキだった。熱々のステーキ皿の上にはレアに焼かれた腿肉とバターで炒めただけのスライスしたジャガイモが載せられていた。

「焼いても美味しいな」

サキウスが里奈の腿肉ステーキを咀嚼しながら、満面



の笑みを浮かべた。

「ジャガイモとよく合うのよね。癖になる味だよ」

アンナも食べるように食べていた。カステイアニは肉を頬張りながら目を閉じて深い溜息をついた。三人は村長宅の地下室に保存されていた高級ワインを飲んでいた。村長はワイン通で大量のワインを保管していた。量が多すぎて全部は持っていけなかったのだ。

### 第三章 新たなる獲物達

北米大陸最北端の街バローの空港に一機の小型航空便が着陸した。中から、十数人の乗客が降り立った。時刻は十四時三十分。気温はマイナス二十五度。

乗客たちはいくつかのグループに分かれ、市内のホテル

ルに直行した。グループのひとつは、アンカレッジ大学に通う女子大生の二人が含まれていた。燃えあがるような金髪で長身、そして美しいブルーの瞳を持つレイチェル・グレイに、日本からの留学生である桑田洋子であった。洋子もスタイルが良く、美しい目鼻立ちをしていた。

その夜、レイチェルと洋子はホテルのラウンジで夕食を終え、自室に戻っていた。部屋は二十畳ほどの広さがあり、中央に広大なダブルベッドが鎮座していた。備え付けのバス・トイレはきれいに清掃されていた。

二人は窓から、夜空で千変万化するオーロラに魅入っていた。それは魂を奪われるほどに美しかった。

「明日は、最高の旅になるわよ」

レイチェルが隣に立ちオーロラを見詰めていた洋子に  
笑顔を向けた。

「そうね。最高のレポートが書けそうよ。温暖化で危機  
に瀕する極北の村。何かゾクゾクするわ」

二人はゼミに提出するレポートを作成する傍ら、極北  
の旅を満喫していた。

「四〇キロほど東にエスキモーの村があるんだって。さ  
つきフロントで聞いてきたのよ。村人が去ってゴースト  
タウンになっているそうよ」

レイチェルがさりげなく、洋子の手を掴んだ。

「温暖化の影響なの？」

洋子は、レイチェルの白い手を軽く握り返した。

「そうみたい。写真で見たとおりみたいよ。家を支えて

いる永久凍土が溶けだして倒壊しちゃうそうよ」

「それじゃあ、住めないわね。他に何かあるの？」

洋子がレイチェルの美しい横顔を見ながら尋ねた。

「村から十キロのところには今は廃坑になってしまった金の採掘場があるんだって。そこにも行ってみる？」

レイチェルは洋子の両肩に手を載せて、洋子の瞳を覗き込んできた。

「天気が良かったらね。明日は早いからもう寝ない？」

洋子の声が、少し上擦って聞こえた。

「うん」

ふたりは、着ていたバスローブを脱いで、全裸になった。二十歳の輝くばかりの美しい裸身が現れた。女達はまるで恋人同士のように手をつなぎ、広大なダブルベッドに横たわった。レイチェルが洋子の両足を押し広げ、臍を剥き出しにさせた。淫毛は少なめで柔らかく、その下にサーモンピンク色の臍が息づいていた。



「そんなに見ないで。恥ずかしいわ」

洋子が身をくねらすようにして、囁いた。

「洋子のマ\*コとってもキレイだよ。女の私でも惚れ惚れしちゃうわ」

レイチェルは洋子のすべすべの尻を両手で押さえながら、膣に口を付けた。

「ああ……。そこは駄目……」

洋子の甘い喘ぎ声と、膣を舐る卑猥な音が聞こえてきた。レイチェルは上目使いに洋子の顔を見ながら、舌を使った。洋子はシーツを両手で握りしめ、小波のように全身を伝わる快感に耐えていた。

レイチェルは洋子の膣やクリトリスを十分に堪能した後で、うつ伏せにさせ、今度は深い尻の割れ目に顔を入

洋子の喘ぎ声がいっそう大きくなっていく。盛り上が



れ、アヌスを美味しそうに舐り始めた。

った白い尻が淫らに蠢き始めた。洋子はアヌスをレイチエルの顔に擦り付けるように動かした。

最後にはシックスナインの体勢をとり、互いのSEXを貪りあった。カーテンを閉めていなかったのも、夜空に描かれた神秘的なオーロラの光が、美女達の裸身を妖しく照らし出していた。



「サキウス。大変だ。アザラシだよ！」

アンナは血相をかえながら、寝室に飛び込んできた。

「朝っぱらから煩いな。二本足か？もちろんメスだろうな？」

サキウスが寝ぼけた声を出した。

「違うんだよ。本物のアザラシを見たのさ。外に倉庫に肉を取りに行ったら、三百メートルくらいのところにアザラシが一頭見えたんだ」

「本当か！」

全裸で寝ていたサキウスが、起き上った。黒々とした男根が天を衝いていた。それを見たアンナがごくりと生唾を呑み込んだ。

「朝から元気だね」

アンナはサキウスの男根を食い入るように見詰めていた。

「そんなことはいい。後でゆっくり抱いてやる。兄貴には知らせたか？」

「カステイアニなら猟銃持って、スノーモービルで行っちゃまったよ」

「俺達も行こう！里奈の肉ももうすぐ切れる」

見渡す限りの大雪原に、カステイアニが運転するスノーモービルが、高速度で疾走して行く。その三キロメートル後方をサキウスとアンナが乗ったスノーモービルが追走していた。三人とも目を輝かせ、心なしか微かな笑みを浮かべていた。先祖代々から受け継がれた狩猟民族

の血が騒ぐのだろう。

その頃、レイチェルが運転し、後部席に洋子を乗せたスノーモービルが、金鉦跡の廃屋前に停車した。ふたりは、最新式のナビゲーションシステムを使いここまでやって来ていた。貧乏学生の身分では、高額なガイドは雇えなかった。

「誰か人が住んでいるみたいね」

洋子が気味悪そうに廃屋を見上げた。

「無人だと聞いてきたけど、そうじゃないみたいね」

レイチェルは、雪原につけられた新しいスノーモービルの走行跡を見詰めていた。

「どうする？」

後部座席に跨っていた洋子が、レイチェルの耳元で囁くように言った。

「せっかくここまで来たんだから、様子を見てこない？」

レイチェルがスノーモービルの運転席から降りた。

「貴女がそう言うなら、私は構わないわ」

「決まりね」

レイチェルが洋子の手を引いて、スノーモービルから降ろさせた。

「済みません。どなたかいらっしゃいませんか？」

レイチェルが廃屋のドアを叩いた。返事は返ってこなかった。レイチェルがドアノブに手をかけた。鍵は掛けられていなかった。

「留守のようね」

「天気が悪くなってきたね。吹雪になるのかな」

「そうね。ここで天候が回復するのを待つか無いわね」

ふたりは、廃屋の中に入った。内部は温泉水で温められていたので、二〇度近くはあった。

「暑いわね」

レイチェルは分厚い防寒具を脱いで、ジーンズにタンクトップ姿になった。洋子もそれに倣った。

二人は最初に、事務室を改造した一階にある居間に入った。家具はほとんどなく殺風景な感じだった。アンナが持参してきたテレビとビデオが、事務机の上に無造作な感じで置かれていた。レイチェルがビデオとテレビのスイッチを押した。すぐに、女二人が、ひとりの若くて美

人の金髪娘を全裸にして凌辱している姿が映し出された。

「何これ？」

それを見た洋子が目を丸くした。

「アダルトビデオよ。興味あるの？」

「レイチェルったら、本当にエッチなんだから。消した

方がいいんじゃない。勝手に見たら悪いわ」

「そうね。他の部屋にも行ってみない？」

「いいけど……」

レイチェルは不安な表情の洋子の手を引き、居間を出て行った。

次に彼女達が入ったのは、元は従業員の食堂であった。

三卓あるテーブルのひとつに、ひとり分の食事が載せられていた。ジャガイモと肉の炒め物であった。少し手を

つけただけで、ほとんど残っていた。

「何か美味しそうね」

好奇心旺盛なレイチェルが皿を持ち上げ、匂いを嗅いだ。

「止めなよ。レイチェル」

洋子が背後から押し留めた。

「洋子はお腹空かないの？」

「お腹がすいて目が回りそうよ」

「そっちは厨房よね。何か残っていないかしら」

レイチェルは厨房に入りこんで家探しを始めた。洋子は食堂の戸口に立ち、不安そうな表情を浮かべていた。

不意に肉を焼く香ばしい匂いが、漂ってきた。洋子が目を丸くして、厨房の方に走り出した。

厨房ではレイチェルが、赤みの肉とジャガイモやタマネギを一緒に炒めていた。

「何やっているのよ！レイチェル」

洋子は、厨房に立ち料理をはじめているレイチェルを叱りつけた。

「何って料理に決まっているじゃない」

レイチェルは料理の手を止めること無く答えた。

「ここは他人の家よ。そんな勝手なことは許されないわ」

「大丈夫だって。家主には私が説明するから」

「……」

洋子は哑然とした表情で、料理を続けるレイチェルの後ろ姿を見ていた。



三十分後、レイチェルと洋子の二人は、食堂のテーブル席に着いていた。テーブルの上には、レイチェルが作った肉料理が皿に盛られ載せられていた。年代物の高級ワインまで、テーブルに載っていた。レイチェルが失敬したものであった。

「さあ、食べよう」

レイチェルが屈託のない笑みを浮かべた。

「本当に大丈夫かな」

「気にすること無いって。食事ぐらいどうってこと無い

わよ」

レイチャルが肉片をフォークに刺し、頬張った。

「何これ？」

レイチェルが目を閉じて深い溜息を洩らした。

「どうしたのよ。不味いの？」

洋子が身を乗り出すようにして、レイチェルに尋ねた。

「その反対よ。こんな肉は食べたことが無いわ。豚肉に似ているようだけど、ずっとジューシな感じね。洋子も食べてみなよ」

レイチェルが肉片をフォークに刺して、洋子に食べさせた。

「本当ね。こんなお肉ははじめてよ。癖が無くていくらでも食べれそうね」

「肉汁がついたジャガイモも美味しいわね」

ふたりは、よほど空腹だったのか、食べるように食べ始めた。

レイチェルと洋子は、食事の後で食器を洗ってから、今度は同じ一階にあるシャワールームに入った。

「何なのこれ？」

洋子が、シャワールームに入った途端声を出した。目の前には、湯が滾々と湧き出る亀裂が見えた。その周りの床は掘り起こされ、大小様々な岩が転がっていた。

「何かを掘り出しているようね」

「この辺は昔、金の採掘場だったんでしょう？」

ふたりは暫くの間、無言で見詰め合った。

「これって金じゃない！」

洋子が、床に転がっていた小さな石を拾い上げた。そ

れは黄金色に輝いていた。

「本当！金だわ」

洋子から手渡された小石をレイチェルが目を細めて見詰めていた。

「ちよつと。来てよ」

亀裂の底を覗いていた洋子が、レイチェルを読んだ。

「何よ」

レイチェルも屈みこんで亀裂の底を見詰めた。

「何か、光っていない？」

洋子が指さした辺りに、黄金色に輝く岩が見えた。

「ねえ。入ってみない。そんなに深く無いようだし、温

度も丁度いいわ」

二人は、競い合うようにして、着衣を脱いで全裸になった。二〇歳の瑞々しく、美しい裸身が露になった。

ふたりは、ゆっくりと片足から湯に入れ、深さ一メー

トルほどの底に降りた。水中に没し、すぐに湯から顔を出した。二人は両手に金塊を握っていた。

「凄い物見つけちゃったね」

レイチャルは両手に持った金塊の重さを比較しながら言った。

「他人の持ち物よ」

洋子はそれを上の空といった感じで受け流した。

「そうだけど。金塊は見つけるし、こんな辺境ところで温泉なんて、私達についているわね」

「きっと、凄い論文が書けるわ。もう上がる？」

「もう少し入っていようよ。極楽気分じゃない」

レイチャルは金塊を亀裂の縁に置いて、洋子の両肩に手を載せた。洋子は目を閉じた。レイチェルの柔らかい

唇が、洋子の唇に押し付けられた。ふたりは互いの舌を貪った。

「金塊を掘っているなら、保管している筈よね」

レイチェルは洋子の尻から顔を上げた。口元が洋子の愛液で濡れていた。

二人は三十分ほども、亀裂の近くで互いを貪りあっていた。

「何を考えているの？」

洋子は何度も逝かされているのか、ぼんやりとした表情をしていた。

「私達大金持ちになれるかも知れない。そしたらハワイに移住して、ふたりで一生を楽しめるのよ」

レイチャルは遠くを見るような目つきで、話した。

「駄目よ。そんなこと犯罪じゃない！」

洋子は叫ぶように言っつて、起き上ろうとした。

「私と別れたいの？」

レイチェルが洋子の腰を押さえつけ、両足を大きく開きサーモンピンクの膣に喰い付いた。激しい勢いで舐り始めた。最初はレイチェルの手を振りほどこうとしていた洋子もあまりの気持ちよさに、鋭い喘ぎ声を上げ、全身を仰け反らせた。レイチェルは、アクメに達し余韻に浸る洋子の美しい裸身をまるで獲物を見るような目つきで見詰め、再び膣に喰い付いた。

洋子の鋭い喘ぎ声がシャワールームに響き渡った。

